

218

葉しょう

祥明しょうめいさん

(絵本作家、画家、詩人)

一九七〇年代から、やさしい色調の風景を描き続けてきた葉祥明さん。今も絵本作家として新作を発表し続け、最近はやや幸せに生きるための「言葉」が添えられた書籍も人気です。広々とした緑の草原に透明感あふれる青空、ぽつんと描かれた家や木や人、動物たち。あの構図はどいうやって生まれたの？ 三百冊超の絵本をつくってきた葉さんの原風景や伝えたい思い、子どもへのまなざし、同年代へのメッセージなど、東京都大田区田園調布の仕事場でお話を伺いました。

阿蘇の草原と青空が原風景

——今年、画業五十年を迎えられたんですね。草原と青空に地平線。真ん中にぽつんと家や木が描かれた葉さんの絵に、子どもの頃から親しみました。ぽつんと描かれたものを観ていると、自分を見つめているような気持ちになり、心が穏やかになるのが不思議です。

葉 家や木に意識がスーッと行って集中するのは、メデイーション（瞑想）しているといえるのでしょうか。それには特別な空間と対象が必要なんです。対象はいくつも



一九四六年熊本県生まれ。一九七三年『ぼくのべんちにしるいとり』で絵本作家デビュー。一九九〇年『風とひょう』でイタリア・ボローニャ国際児童図書展グラフィックス賞を受賞。一九九一年神奈川県鎌倉市に「葉祥明美術館」が開館。一九九七年『地雷ではなく花をください』（絵を担当。柳瀬房子著）で日本絵本賞読者賞受賞。二〇〇〇年、長崎の原爆をテーマにした絵本『あの夏の日』で第六回平和・協同ジャーナリスト基金賞奨励賞受賞。二〇〇二年、絵本創作の原点である熊本県阿蘇に「葉祥明阿蘇高原絵本美術館」が開館。

あると散漫になってしまうので基本的に一つだけ。

一九九一年に葉祥明美術館をつくりました。オープンしたての頃、感想ノートに書かれた「十七年間我慢に我慢を重ねてきたけれどここにきてホッとしました。もう一度がんばってみます」とか、「家族とけんかをしてやって来ましたが心が落ち着きました。今度家族と来ます」などの言葉を見たとき、この美術館は僕のものではなく、ここを必要としている人のためだと感じました。——そよぐ風や小鳥の声…、目に見えないものを感じているような気持ちになるのです。

葉 やなせたかしさんは僕のことを、「空気を描く人」と言ってくれました。やなせさんが雑誌『詩とメルヘン』の編集長だったとき、連載の仕事の声をかけていただきました。毎月描くのは気が進まず断りに行ったのに、「君が葉くん？ いい人そうだからやってもらおう！」と一方的に言われて、思わず「はい！」と答えてしまっ

て以来、ずっとお世話になりました。今の僕になるための重要な出会いでした。

——作品の原風景は？

葉 郷里の熊本「阿蘇」の草原と青空です。市内の高台から阿蘇山が遠くに見えました。あの向こう側には何かあるんだろうと、山の彼方や空に憧れて少年時代を過ごしました。そして親父や兄貴たちから東京や大阪の土産話を聞いては、どんなところだろうと空想していました。

——何人兄弟ですか？ お生まれは終戦の翌年。

葉 十二歳上の兄を頭に七人。僕は六番目です。幼少期から兄や姉たち、親父が商店街で営んでいた中華レストランの従業員、お客さん、道行く人：人間や出来事をよく観察していました。まだ戦争の名残りがあって、進駐軍が店に置いていったアメリカの通販雑誌、シアーズのカタログを見て驚いていました。紙が上質でオールカラー

刷り。匂いもよかった。カッコいいブーツや自動車：世界が広がりました。少年時代から「これは何？」「どうなっているの？」と世の中に対する好奇心、探究心でいっぱい、本もたくさん読みました。

——どんなものを読みましたか？

葉 伝記、神話、童話、民話：いろいろです。『アルプスの少女ハイジ』にチーズをはさんだパンが出てくると、「いったいどんな味？」と未知のものへの関心がふくらむ。見るもの、聞くもの、味わうもの：五感を統合していたのかな。マジカルでワンダフルな世界を楽しみ、いろんなことを考えました。

知らないこと知ることができて友達とも会えるから、小学校四年生までは学校が楽しみでした。でも、五年生のときの算数のテストでガンと来た。できた人から校庭に出て、できない人はいつまでも教室に残される。三十分くらい経ってやっと書き終わって教室を出ようとすると先生が、「葉くん、皆を呼んでらっしゃい」と。そのとき世の中の仕組みを悟ったね。テストの成績がいいとほめられていい目に遭い、できないと机につぶしたまま放っておかれる。祥明少年どう生きる？…考えました。

——答えは？